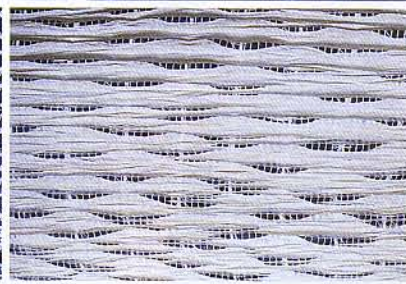
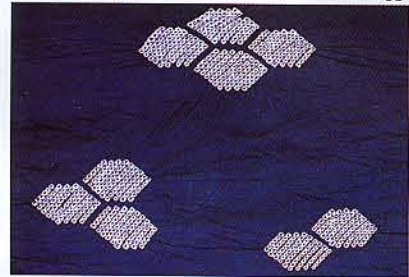


絞り技法の種類として「巻き上げ絞り」(01)、「みどり絞り」(02)、「小帽子絞り」(03)、「ひしゃき縫い絞り」(04)、「横引き鹿の子絞り」(05)などがある。技法により加工方法も道具も異なる括り作業には通常、4~10か月を要す。絞り工程を終えるまでに1枚の布を4~5人の職人が括ることもあるという。



地元で見つけた絵はがき。有松の町は広重、北斎らの浮世絵にもたびたび描かれた。左は2代広重作「14代将軍家茂上洛有松通行の図」。右は北斎作「東海道五拾三次 鳴海」。柄や仕事ぶりは、今も昔も変わらない。



伝統の絞り技法を新たな発想でとらえ、三宅一生のファッションショーのために提案したハンドブリーツをはじめとする斬新なテキスタイルを創造。ファッションの世界に有松絞りの技を巧みに取り入れている久野剛資さん(写真左)は、「柄を楽しむものから形状や空間設計の面白さを楽しむものへ。現代の絞り染めは変わりつつある」という。「日本の絞り染めは緻密で発想力が豊か。その伝統を守ることも大切ですが、時代の変化に合わせて若い人たちに絞りの面白さや魅力を伝える新たな取り組みもしていかなければ」と。積極的に後進の指導にあたっている久野さんのものには国内はもちろん、海外からも若者が絞り染めを学びにやってくる。上の写真は久野さんに師事する田中太さん(写真右下)の作品。完成まで「3週間括りっぱなし」の毎日だったという。

久野染工場  
名古屋市緑区鳴海町字境松4-21  
☎052-621-1041



HELLO! JAPAN



体、造形としての美しさを宿していた。伝統的な技法を守り伝える有松には、絞りの技法をインテリアやファッションに生かし、独自の世界を切り開いている人々も少なくない。染色工場を営む久野剛資さんも、そのひとり。絞りの持つ形状の面白さを生かした久野さんのテキスタイルは、三宅一生をはじめとする内外のデザイナーから高い評価を得ている。伝統の技に裏打ちされた斬新な発想こそ、この街に受け継がれてきたものづくりの原点。その精神は今も、脈々と息づいている。

有松・鳴海絞会館で足田三浦絞りを披露する藤原すみ江さん(右)と、手蜘蛛絞りの技で伝統工芸士にも選ばれている本間とめ子さん(左)。おふたりとも、括りの技法は「母親の仕事を見て覚え、小学2年生から仕事を始めた」という。



# 1本の糸と1枚の布が織りなす絞りの技

400年の歴史を誇る絞りの技を守り伝える伝統文化、進取の気性

有松絞りの手ぬぐいは江戸期、今の貨幣価値に換算すると、1本2万8000円にも相当する高価なものだったという。糸を紡ぎ、機を織り、一粒一粒絞りを施す、完成までの工程は当時、すべてが手作業。勢い、高額にならざるを得なかった有松絞りが人気を博したのは、ひとえに絞りにならではの美しさ故といえるだろう。

有松では、糸で布を括り防染する技法が100以上も生み出され、伝承されてきた。その技の担い手はおもに女性。括りの実演を見学しようと訪れた有松・鳴海絞会館でも、一心に糸を操っていたのは7才の頃から括りの仕事を始めたという女性たちだった。「ようきてちょうだいした」。顔をあげてこちらに話しかける間も、糸を持つ手はリズムカルに動き、正確に布を括っていく。円錐状に布を括る手蜘蛛絞り、青花の印に沿って布を絞る足田三浦絞り……。精妙な手技が生み出す文様は染色、糸抜きを経て、はじめて姿を現す。その仕上がりを想像しつつ眺める布は生き生きと波打ち、それ自